
強さを求めて

1 1 0 4

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

強さを求めて

【Nコード】

N8638Z

【作者名】

1104

【あらすじ】

ネギまに転生した主人公

しかし、父親はあの人だった！？

ネギまともう一つの世界が交差する世界

そんな世界でなんとなく生きる主人公の物語です

調子に乗って書いてみた

ブログ（前書き）

最近、他の作品の更新が止まっているくせに執筆しました
前の作品を読んでいらっしやった方々には申し訳ありません
こちらはがんばります！！

プロローグ

唐突だが、俺は転生した

いやね、まあ、前の世界では曲がりなりにも普通に大学生活を送っていたわけですよ。それが、俺が歩いていたら偶然隕石が俺の頭をぶち抜き、その隕石が原因で起こった地割れに巻き込まれ、俺の体はマントルに吸い込まれたらしい。らしいというのは死んだあとに会った神（自称）に教えてもらったからんだけどね。それで、転生させてもらえと言われるときは嬉しかったよ。でもさ、転生する世界が完全ランダムでもらえる特典もランダムっていうのにはどうにも釈然としない。まあ、転生してしまっただから仕方がない。それで、転生したのはネギまの世界。現在、麻帆良学園中等部の2年さ。どうにも原作組みと同年代らしい。あと、一番びっくりしたのは元々母親の顔しか知らない母子家庭だったのだが、父親があの範馬勇次郎と知ったときはかなり驚いたね。もちろん、アニキの範馬刃牙とも知り合ったよ。それで、いろんなことがあって勇次郎を倒すのを刃牙のアニキに預けて俺は普通に中学生してます。もちろん、いろんな戦いを見に行きましたよ。父親が勇次郎つてのもあったのか、最大トーナメントや大擂台賽を見に行ったりしましたよ。徳川のじいさんにも地下で闘わんか？なんて嬉しいこと言われて何回かさせてもらってます。一応、勝てるには勝てるけど、刃牙のアニキには勝ち方が劣るんだな。マホメド・アライジャーに勝った感じで勝ってみたいね。アニキにもちよくちよく会ってるけど、もっと鍛えたほうがいいって言われるし、その前にいろんな人に言われてるんだな。お前の身長に対して筋肉のつき方が足りないって。そうそう、この前会って一番びっくりしたのはジャック兄さんね。一応、気にしてウェイトトレーニングをやってたんだけど。それで、この前アニキに会ったときに、やっとそれらしい体

になったと言われたんだよな。アレは嬉しかった、病院でだけど・さつき言っただけ、たまに地下闘技場で闘わせて貰ってるんだけどね。どうにも、怪我が多くてよく病院にお世話になってるんだよな。それが原因で現在出席日数がやばいです、はい。今は足りない日数分の補習の帰りです。幸い、もとは大学生の頭なので中学生のテスト程度は余裕でどうにかなってます。なんで、ある程度は補習も軽減されてますね。そろそろ、先生方にもばれるころかな〜とか思いながらも範馬ではなく母親の播磨を名乗って生活してます。そうそう、名乗り遅れてたけど播磨^{はりまろ}力、本名範馬力です

そんな俺は、補習帰りの途中鬼に襲われました

ネギまの世界だな〜とか思いながら成り行き任せしていると鬼が「悪いが、見られたもんは仕方ない死んでもらうで」なんて言いながら金棒振り下ろすもんだから消力使ってそれをいなして、もっかい消力使って鬼のどてっばらぶち抜くつもりで殴ったら消えました

「どうしようか…早く帰ろう」

その場から自分の出せる目一杯の速度で逃げました

その場から3分以内に逃げれば捕まんないって言われたけど、あれってホントかな？

アレ嘘だし、なんか長い日本刀を突きつけられています

「お前は、何者だ!？」

「だから、通りすがりの一般人ですって」

「嘘をつくな!一般人が鬼を倒せるはずがないだろう!大方、お嬢様を誘拐しに来た違う派閥の者達が偶然居合わせてしまったのだろう。違うか!？」

そんなことドヤ顔で言われても困ります

「だから、そんなんじゃないですって!男子中等部2-Bの播磨力です、確認してもらえば分かるはずですよ!」

そこからは水掛け論。相手が不審者だといえどこちらが違うと言っている

しかしながら、相手の持っている武器が悪かった。長い刀から逃げるようにじりじりと後ろに下がっていったが、背が壁についてしまった

「それ、もう逃げ道はないぞ。命が惜しくばキリキリ吐くがいい」

うつわ、どS顔だし、ドヤ顔だし。はてしなくイラツつくくるな

「お嬢様って誰ですか！？こっちは学校帰りです、ただの！」

「ただの学校帰りが、鬼など倒せるか！！」

なんか、このやり取りも疲れたな。俺が認めたら終わるんだろうか？それならば、認めてしまったほうが・・・はっ、いかんいかん。こんな感じで冤罪は増えていくのだろうと思っていると、なんか人が跳んで来た

「刹那くん、その子は誰だい？」

うわ、デスメガネだ。生で見たのは初めてだよ

「不審者です、この手で確保しました！」

相変わらずドヤ顔で僕に長刀を向けながら言う刹那と呼ばれた女生徒「ですから、俺は不審者なんかじゃないですって！男子中等部2・Bの播磨力です！」

「ちよつと待ってて、確認取るから」

そう言って、デスメガネはどこかに電話をかける

「高畑先生、そんな事をしなくてもこやつは…播磨力？・・・古菲クワイフェイがよく言っているやつか？」

「そうです！その播磨力です…って、え？くーふえいさんのこと知ってるんですか？」

ってか、何回も播磨力って言ってるんだから気づいて欲しかったな・・・哀しくなんかないよ

そうそう、くーふえいさんとは強くなりたいつて思って親父やアニキがしてみたにいろんな武術系の部活とかサークル、同好会に道場破りのなことでたら知り合って、事あるごとに試合を申し込まれてます。ったく、こっちは筋力の増強しないといけないのに。まあ、そこでうんと頷いちゃうのは相手が美少女だからかな。もし

かしたら、気があるのかもしれない。っと、話がずれたか。まあ、そんなこんなでくーふえいさんの修行に付き合ったりしてます。え？勝率？3：7であつちが勝ってます。そりゃね、中学生の女の子相手に水月打ちとか紐切りとかできませんって。はい、すいません。俺がチキンなだけです。ただ、本気の試合とかなったら使いますよ。現に地下闘技場ではバンバン使ってますしね。折角の技術使わず錆付かせるのはもったいないからね。

「もちろん、古菲は私のクラスメイトだ」
相変わらずのドヤ顔

「刹那くん、確認取れたよ。彼は正真正銘ただの留年しかけている一般生徒だよ」

「すみません、高畑先生。こちらの方で勘違いだということも分かりました。お手数をおかけしました」

「じゃあ、疑いが晴れたのなら俺帰りますね。それじゃ」
ダッシュをかける俺

その様子をポカンとした様子で見送る二人

俺は、前の日の俺に言いたい何故俺は逃げたのか！？と。なぜって？そりゃ、次の日に担任の先生から学園長のところ行くよう言われましたよ。そのとき先生がおい、お前何したんだよ的な目で見たのは忘れません
まあいいや、もうネギも赴任してるみたいだし。女子中等部に出向くと思いますか

プロローグ（後書き）

どうでしたか？

力くんは前の世界でちよろちよろっとしかネギまの原作を読んだことありません

原作キャラの名前と魔法はどんなのか的々漠然とした知識しかありません

設定（前書き）

そのまんまです

設定

とりあえず設定

世界観：ネギまの世界にグラップラー刃牙の世界をぶち込んだ世界
主人公設定

F a t e っぽくステータス表示 () 内は気による強化後

クラス：グラップラー（格闘家）

真名：範馬力

性別：男

身長・体重：170cm、68kg（成長中のため推定）

属性：混沌・善

筋力 B + (A +) 耐久 B (A)

俊敏 B (A) 魔力 E

幸運 C + 宝具 E （てか無い）

保有スキル

範馬の血：A この世で最も濃い液体。コレがある限り闘争からは逃げる事ができない。武の才としては考え得る限りの最高のモノ
戦闘続行：B 往生際が悪い

原作知識：C 基本はランク上位のものだが本人があまり覚えていないためこの程度のランク（作者がこの設定よく忘れますwww）
容姿

黒髪、黒目の一般的な日本人的な容貌。短髪をそのまま立たせている（剛毛のためワックスなどは不要）

整っているといえば整っている顔、視力は両目2.0以上なのだが
学内では眼鏡着用

服装

学ラン姿が多い

私服もラフなものが多い（フード付の衣服が多い）
いわゆる戦闘服というものは無く、胴着も着ない

性格やら何やら

基本的に受身な性格

母親が世界各地を喧嘩旅行しているときに勇次郎と出会い、母親が一目ぼれ

そのまま勇次郎との間に子ができる

刃牙は生まれているため、刃牙とは異母兄弟の設定
現在、神の子激突編までは終了している刃牙の世界

ある程度、刃牙のほうは原作とはずれが生じつつある

そして、主人公はネギまの原作をいまいち知らないため、原作に関わっている自覚もなけりや、原作ブレイクしてる自覚もない
といっても、物語は原作通りに進む

原作乖離のようなことはまず起こらない…はず（作者の考えが甘い
ため）

原作準拠のストーリーが進む予定

設定（後書き）

おいおい、いろいろな設定を追加していこうと思います
疑問があつたら感想のほうに書いていただけるとこちらに追加で書いていこうと思います

書いて早々改訂

第一話　強さへの欲望（前書き）

連日投稿!!

この調子でポンポン上げていきたいです

第一話　強さへの欲望

そんなこんなで、現在、学園長室のある麻帆良学園女子中等部へと歩を進めていた

あつれ？学園長室ってどこにあんだろ？

「ちよつと、アンタ！！」

迷ったな、どうしようか。ここは思い切って人に聞くしかないよな

「無視してじゃないわよ！！」

つと、あぶね。一発貰うとこだった

「避けてんじゃないわよ！！」

うん、ここ最近運が悪いな。お払い行こうかな。そうか、コレが原作補正なのかな。それにしても、神楽坂アスナに怒鳴られるってテンプレなのかな？なんて思いつつ聞いてみる

「学園長室の場所って分かる？」

「ハア、いきなり何よ！？」

「ああ、それなら分かるえ。よかつたら、案内するえ」

「別にいいよ。場所さえ分かればいいし」

「わかつたえ」

近衛木乃香に聞いた場所に向かって歩を進める

まあ、なんとも言えない雰囲気。女子部に男子がいるからな。いろんな方向からの視線が痛いこと痛いこと

やつと着いたぜ、学園長室。案外扉は普通なんだな

「男子中等部2-Bの播磨です。入ります」

そのまま入る

「お主が播磨くんかの？」

「違いありません」

「今日、お主を呼んだことの理由はお主も分かっていると思うが、昨日のことじゃ」

「ああ、あの鬼のことですね」

「そうじゃ。お主にはこの後二つの道がある。一つは昨日のことを忘れてこのまま、ただの学生としてこのまま学校生活を送ることじゃ。そして、もう一つは昨日のことを忘れずこの学園のために活動してもらうのどちらかじゃ。こちらとしては、昨日の事もあるのでお主には後者を選択してもらいたいの」

ホッホッホッホと笑う学園長

「まあ、おｒ・・・自分としては構いませんよ。で、学園のために活動っていうのは、主に何をするんですか？」

「簡単に言えば、学園の警備が主じゃな」

「はあ、警備ですか」

「腑に落ちないという顔をしておるの。理由は昨日も見ただじゃろ？あのような鬼が度々この学園に刺客として送り込まれるのじゃよ。この学園には表や裏の長の御子息、御息女が多かれ少なかれ在籍しておるからの」

「へー、そうなんですか」

「まあ、お主もおいおい分かるじゃろ。しからば、お主には今日の夜に世界樹の前の広場に来て欲しいのじゃが、よいかの？」

「はい、大丈夫です」

「では、わしからは以上じゃ」

「そうですか。では、失礼します」

そう言って部屋を出る俺

——力の出た後の部屋

「彼について、どう思う？タカミチくん？」

「今のところはなんとも言えないです。何せ、情報が少ないですから」

苦笑しながら答えるタカミチ

「うむ、君たちからの彼の報告書にも書いてあるが、父は無し。母の手一つで育てられ、母が過労で死んだため、この学園に来た。ここまででは、一人の悲しき孤児じゃ。しかしの、この学費や生活費の出所があ徳川家じゃからの。どこで、どう行けばあ徳川家が一人の中学生を支援するのか分からんわい」

「そこも、調べているんですが…どうにも、厳しく情報規制があるみたいで、あの子の口からじゃないと厳しいですね」

「そうか、結局のところは彼が自分から身の上を話すまで分からないのじゃな」

ため息をつく学園長

「あと、気になるのはあの子の入院暦ですね。平均すると約2ヶ月に一回は入院しているという結果が出ています。注意して思い出せば、よくギブスをしているのを思い出します」

「うむ、そのあたりも彼しだいということじゃ」

「そうですね、学園長」

彼らは、東京ドームの地下闘技場のことを知らない

とりあえず、夜になったんで世界樹前広場に行きたいと思う

あの後、いろんな視線を浴びながら帰ってたら、くーふえいさんに絡まれ、そのまま試合風の稽古をして帰りました

晩飯も食べたし、大丈夫だろう

さて、世界樹前広場に着きました。うーん、周りの人の視線が痛い

「今日から、学園の警備などの当たってもらっ播磨力くんじゃ」

と、学園長に背中を押され一歩前に出る

「ご紹介に預かりました播磨力です。若輩者ですが精一杯がんばりますので、どうぞご鞭撻の程よろしくおねがいします」

頭を下げる俺

「そこでじゃ、今宵は幸い襲撃もない、彼の実力を調べたいと思う。

大丈夫か、播磨くん？」

「あ、はい。大丈夫です」

「では、高音くん。彼の相手をしてやってくれい」

「わかりました、学園長」

おゝ、この人か。ウルスラの脱げ女

「よろしくお願いします」

「おや、ではこちらもよろしくお願いします」

頭を下げる俺に対し、少し頭を下げる高音

「それでは…はじめ！！」

と言つてもどうしようかなゝ…とりあえず近づかないことには始まらないしな

持てる脚力全てを使い高音に近づく力。しかし、それは高音が繰り出す影の槍によって防がれる

ちつ、暗いとどこに影があるか分からんから避け辛い

「なかなか、やりますね。最初の瞬動術には肝を冷やしました」

瞬動術？何じゃそりや？

「ですが、こちらも負けるわけにはいきませんので、こちらもそれ

相応の魔法でお相手します！！」

おお、向こうさんのテンションが右肩上がりだ

「出でよ、黒衣の夜想曲！！」

高音を守るように巨大な仮面をした黒いモノが出てくる

「おおゝ！魔法ってスゲー」

クハハハハハと自然ともれる笑い

「何がおかしくていらつしやるの！？」

「そりゃさ、親父とアニキ達が強いのは分かってるけどよ、仲間はずれは寂しいじゃん。やつと、これでよ、あいつらを仲間はずれにできるって思うとなゝ。コレは笑わないわけにはいかなないよなゝ」

父と兄達が自分の知らないところで闘うことへの嫉妬^{シエラシ}…それこそが、

かれ播磨力、範馬力の活動意欲であり、彼が地下闘技場で闘う理由だ。父に追いつきたい、兄達に追いつきたい。その思いが彼を闘争

の道へと走らせ、節操無くありとあらゆる技術を模倣する結果となる。そして、今彼は父と兄達が知りえない世界へと足を踏み入れたのだった。その事態に彼の脳は脳内麻薬^{エンドルフィン}を出し始め、彼の運動能力を向上させる

力が走り・・・前蹴りを打ち込む。それは、影の防御に守られる。守られたということを無視し、そのまま攻め続ける力。だが、影により吹き飛ばされ地面を転がり、壁に激突する

「クハハハハハ！」

笑う力。そこに追い討ちをかけようとする高音

「だよね、やっぱり闘いはこうでなくちゃいけない！最近、どうにも温くて困ってたんだよ！」

彼は立ち上がり、壁に足の裏をつけそのまま激突した

これは、後にピクルと呼ばれる原人が刃牙相手に使用する技だが彼はまだこのことを知らない。しかし、彼の場合は両腕を前に突き出す形をとっているのでピクルのとは少し形が変わっているのか、これのオリジナルで概ね正解であろう

「おいおい、コレも防がれるとはな。まあいいや、腕一本でも貫通すれば問題ない」

そのまま黒衣の防御を貫通した腕を高音の顎の近くで振る

崩れ落ちる高音

「ふーん、魔法とは言っても脳を揺らされることに対しては無防備か。しょうがない、人体だ」

一人考察をする俺。つと、いけないいけない。闘った後、相手ほつといて考える癖いい加減治さないとな

「あ、あんま触んないほうがいいですよ。あ、そうそう横にして、3分ほどで目が覚めると思うんで。心配しなくても命に別状は無いですし、後遺症ありませんよ」

——とある悪の魔法使いの感想

クククク、偶の集会に来てみるのも悪くない。全く、面白いヤツだ。いきなり瞬動術を使って殴りかかったかと思えば、吹き飛ばされ私を落胆させた後にまさか、あのような技を使うとはな。なんだ、ここにもまだ面白い人間がいたもんだ。そういえば、播磨力と言えは…うちのクラスの古菲がよく出す名前だな。あとで、茶々丸に情報を集めさせておくか

——周りで見ていた者達

「うむ、今は良い加速じゃ」

「学園長、今のは瞬動術ではないのですか？」

「ガンドルフィーニくん、それは違うぞ。なぜなら、彼はつい昨日魔法の存在を知ったのじゃからな。そんな人間が気による強化も無しに瞬動術など使えるはずが無かるう」

周囲の人間の動きが止まる

「それでは、播磨は身体能力のみであの動きをしたというのですか？」

「そうじゃ 鎚木くん」

「アイツの身体能力がそこまでとは、驚きです」

「あの子は鎚木先生のクラスでしたね」

「ええ、かなり怪我をしやすい人間だという認識しかありませんでしたよ」

「うゝん、人間が魔法や気による強化無しであの速さとは・・・正直不気味ですね」

「ですね。私は、アレは鬼か何かの加護を受けてるとしか思えませんが」

「うむ、後でそのことは彼に聞いてみるのが一番じゃろ」

「え？さっきのパンチ？」

桜咲刹那に声をかけられた。どうやら、さっきのパンチについて聞きたいらしい

「はい。さっきのアレは寸剄ですね」

「ああ、まあ。俺はノーインチパンチって言って教わったんすけど」「どこで、その技術を？」

「どこだったけな？たしか、アメリカのちっちゃなボクシングジムだった気がします。その人も、どっかの中国人に教えてもらったとか何とか」

「教わった場所を忘れたとはどういうことですか！？」

「あの頃はがむしゃらに強くなりたいと思っていただけで、場所はどうでもよかつたんですよね」

「そううだよな、世界廻ったな」

アメリカ、ロシア、中国・・・世界の中枢国家はほとんど行っただんじゃないかな？目的？喧嘩。主に母親の。なんで、世界各地を廻って喧嘩しにやなんのじゃ。母親が喧嘩しに行く間に色んなジムやら道場に預けられてました。あの人、今どこで何してるのかな？命がやばいとか言って死亡届出して逃げて、徳川のじっちゃんに頼んで新しい戸籍貰ってたな・・・どんだけ人望あんだあの人

「あの、最後の瞬動術を用いた体当たりには感服いたしました。あのような使い方もあるんですね」

「さっきから、しゅんどうじゅつ？って言われるけど、何ですかそれ？」

あれ、固まったぞ

「で、では、瞬動術ではなくただの脚力であの速さと・・・」

「だから、瞬動術って何ですか？」

「瞬動術と言うのは魔力や気によって脚力を強化する技術です」

「いわゆるピリオムですね。いや、どっちかって言うとかヘイストか？」

「ぴりおむ？へいすと？よく分かりませんが、足先に魔力や気を集め爆発的な加速力を手に入れる技です」

「そうですか、じゃあピリオムやヘイストみたいな自分の速さを上げるわけじゃないんですね。その場だけの爆発的な加速か。この前アニキが見せてくれた蜚？ダツシュみたいだな」

「ご、ゴキブリですか・・・」

「だって、ゴキブリってスタートダツシュからトップスピードで走れるんですよ。そりゃ、蜚？ダツシュみたいって言われても仕方ないでしょう。ってか、その技創った人もゴキブリ見て創ったんじゃないですかね？」

「そんなことは・・・」

「どっちでも、技術は技術です。使えるようになりたいですね」
会得したらアニキに自慢できるし

「そうですか」

すると、学園長が近づいてくる

「コレで分かったように、彼も十分力を持っておる。これからは彼も我々の一員じゃ」

頷く面々

ブルッ

うわ、なんか嫌な感じした

この悪寒が本当に悪いことを引き込むとは今の彼が知る由もなかった・・・

第一話「強さへの欲望」(後書き)

どうでしたか？

力くんはまだ気の内容を知りません

原作知識が適当なせいですね

あと、刃牙はこの時点でゴキブリダッシュを使えます
開発した業をちよくちよく弟に見せつけてるわけです

第二話　気（前書き）

刃牙読んでたら次の日になつてた
まあ、この調子で次もあげたいな（遠い目）

第二話　　気

うーん、今日は変な日です。朝、下駄箱に入っていた手紙に放課後屋上に来て欲しいという旨のことが書いてあったため、来てみたはいいいんですが誰も来ません。うん、いたらずらです。この事をクラスの奴に言ったら可愛そうにと、ジューズをおごってもらいました。そこまではいいんです。次に、寮の部屋に戻って今日の分の鍛錬をしていたらドアがノックされて玄関に行ってみると同じような手紙がありました。そこには、ここ来いとご丁寧に地図も着いていました。そのあと、鍛錬を終わらせてその地図にある所まで行きました。それで、指定の場所へ来たのはいいんですが・・・なんか変な家の前にいます

今は、どうした物が迷っています

うーん、声をかけるのか？インターフォンがあるようには見えないし・・・それにしても、ログハウスか・・・こんな家に住んでみたって母ちゃんは言ってたっけ

まあいいや、とりあえずドアをドンドンしてみよう

扉を叩こうとして近づくと扉が開き、一人の女性が出てきた

あ、こいつ、茶々丸だ

「お待ちしておりました。どうぞ、こちらへマスターがお待ちです」

ほんとに、マスターって呼ぶんだ。それにしても抑揚の無い声だな・

・・・やっぱ、ロボットって感じがするな

「はあ、お邪魔します」

そう言っただけで家に入る。案内されたその先にはネグリジェを着た少女が偉そうに紅茶を飲んでいた

「よく来たな、播磨力。いや、範馬力と呼んだほうがいいか？」

意地の悪そうな笑みを浮かべながら俺の本名を告げるエバンジェリン

「おや？俺の本名はあまり出回って無いはずなんですけどね」。どこから、その名前を？」

「知ってどうするつもりだ？」

「知り合いだったら、イタ電しまくります」

「ククク・・・面白い奴だ。なあに、簡単なことだよ。少しばかり徳川のデータベースに進入して見つけたよ」

「あゝ。それなら仕方ないですね」

「どうだ？母親は元氣か？」

「知りませんね。どっかで元気にやつてるとは思いますが・・・なにせ、世間では死んだ者となってますし。それにしても、うちの母親と知り合いで？」

「少しな」

遠い目をするエヴァンジェリン。この人も、あの母親に苦労させられた人なのかな？5歳児に本格的なスパイする人だもんな

「で、俺を呼んだ理由は？えーと・・・「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」じゃあ、エヴァンジェリンさんですね」

「簡単だよ。どうだ？私に師事してみないか？」

「するといい事ありますか？」

「昨日言われていた瞬動術を会得きる。その他、魔法使いに対抗できる技術を手に入れることができる。貴様の父親に勝つことも可能だぞ？」

「それなら、弟子になりましょうかね。ああそうそう、父親のこととは兄に一任してあるんで興味ないですよ。それに、俺はどれだけ技術を会得しても親父には勝てないですし」

「ほう、それは何故だ？」

「闘うと結果がどうあれ母に殺されます」

「そうか・・・」

どうやら納得してくれたようだ

「それで、お前はどれぐらいこの世界について知っている？」

「何も。知ったのがつい昨日みたいな感じですから」

「そうか・・・（ということは、どのようになでも染められるということだな）ククククク」

うわ、何この人急に笑い出したよ

「ちよつと、ついて来い」

立ち上がり、違う部屋へ行こうとするエヴァンジェリン

「え、ちょ、まっ!」

慌ててついて行く俺

ついて行くとそこには一つ大きなボトルシップのような物があつた。ようなとは、ビンの中には船ではなく精巧なミニチュアの城があつたためである

これが別荘ね〜

「そこに立て」

「あ、はい」

あくまでも、これから起こることは知らない風を装う姿が消える。思わず目を閉じる

目を開けるとそこには幻想的な空間が広がっていた

「おおおおお」

思わず声を上げる

「どうだ、驚いたか」

ドヤ顔でエヴァンジェリンが答える。それにしても、この世界の人にはよくドヤ顔するな

「コレも魔法で?」

「もちろんだ」

「へ〜。これって、外に出るのはどうすればいいんですか?」

「1日経てば外に出られる」

「へ〜一日・・・一日!」?

「ククク…。心配するな、ここの一日は外での一時間だ」

「ああ、そうですか」

がちで、一日の場合は本格的にやばいのだ・・・進級が「まあ、立ち話もなんだこっちに来い」

さつさと奥に行くエヴァンジェリン

「さて、コレで魔法を使ってみる」

小さな杖を渡される

「コレでどうしろと？」

「コレを振りながら『プラクテビギ・ナル火よ灯れ』アールテスカットと唱えてみる。
お前に魔法の才能があったら火がでるかもしれん」

「はあ」

とりあえずがんばってみる

2時間後

「み、みごとに、で、でないな。クククク……」

笑いをこらえながら俺に言うエヴァンジェリン

「うゝん、でないっすな」

別に魔法を使うことに興味は無いのでいいです

「まあいい。別に魔法のことはお前に期待していない」

「じゃあ、なんでやらしたよ？」

「あ？なんか言ったか？」

「別に。ヒュッ」

この2時間でだいぶ距離感も縮まったかな？

「とりあえず、お前には気の使い方をマスターしてもらっ」

「おお、待ってました」

「とりあえず気についてな。簡単に言うと、人間の体内に秘められた生命エネルギーのことだ。コレを用いることで身体能力の向上をすることができる。中には厳しい修行により自然と体得する化け物のような一般人もいるがな」

あゝ、これ確実に親父気を使えるな。わざと使っていないだけで絶対使えるなコレ

「へ」

「言っとくがお前も使える一歩手前のようなところにいるんだから

な」

「どうやれば使えるんですか？」

「ふむ……体の中に抑えつけてあるものがあり、それを一気に毛穴から噴出させる、というイメージでやってみろ」

「はい」

とりあえず、そんなイメージでやってみる。例えの表現が某ハンター漫画の念のイメージみたいだな

なんか、でてきた

「なんか、出てきたっす」

「それでいい（まさか、こんなに早く出るとはな……あの例えハンターハンターのオマージュなだけなのだが）」

彼の思ったことは概ね正解のようだ

「では、その出てきたものを足の裏に集中させてみる」

彼の姿が消え5、6m先に現れる

「おお、簡単に蜚？ダッシュができた」

「それが、瞬動術だ。ここから先の奴らは大方それを使ってくるからな……って聞いてないな」

彼の姿が消えたり出たりする光景が広がっている。姿と姿の間隔がドンドン広がる

1時間後

別荘のいたるところに彼の姿が映る

「この調子だと虚空瞬動術もマスターしたようだな（正直ここまでとは思わなかった）。おい、いい加減にしろ！戻って来い！」

その声に彼の分身が消えエヴァンジェリンのもとに現れる

「呼んだ？」

だいぶ疲れているようだ。大量の汗をかき、ひざに手については「は」言っている

「その様子だ。体も温まっただろう？私と模擬戦だ」

「おっす」

広いところへ移動する

「よし、どこからでも攻めて来い。遠慮は要らんぞ」
「押忍」

彼の姿が消え、エヴァンジェリンの目の前に現れ拳を打つ。しかし、その拳を獲られ投げられる

「ほゝ、合気道ですか。渋いっすな。これほどの技術一体どこで？」

「100年前にちんちくりんのおっさんに教わった」
「ここは反応しておこう」

「100年前？・・・へ？100年？？」
目を点にする

「おや、言ってなかったか？私は600年の時を生きる吸血鬼。エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさ」

「ほゝ、吸血鬼っすか。ファンタジーすな。それにしても、それほどの合気道の技術・・・まさか渋川さんほどの技術を持った人は初めてです」

「ふん、興が削がれた。今日はここまでだ。お前も疲れただろう。時間がくるまで休むがいい」

「そうさせて貰いますよ」と

時間一杯休んで別荘の外に出ました

「じゃあ、俺はこの辺で」
帰ろうとすると声をかけられる

「あの別荘を利用したくなったら来るといい。いつでも使わせてやる」

「どうもありがとうございます。それではまた」

力が出て行った後のエヴァンジェリン宅

「お帰りになられたのですか、マスター？」

「ああ」

エヴァンジェリンを見つめる茶々丸

「どうした、私の顔に何かついてているか？」

「いえ、マスターの顔が楽しそうだったのと頬に傷がついていたので」

頬に手を当てるエヴァンジェリン。確かに、彼女の頬には傷がついていた

「ほく、やるな。あいつも、油断していたつもりは無いのだから。全く、面白い人間だよ」

「マスターが楽しんでおられるようで何よりです」

こうして、播磨力が気を使えるようになったのであった

いまだに、彼は主人公ネギ・スプリングフィールドと会っていない

第二話　〜気〜（後書き）

どうでしたか？

力くんには魔力がほとんど無いし、才能もありません
気は上の中クラスで使いこなせます

第三話〜停電〜（前書き）

今回はちょっと短めです

第三話　～停電～

どうも、播磨力で～す。無事進級できました！！

出席日数がやばかったが、何とかなっただけ。聞けば、学園長が口利きをしてくれたらしい。ありがたい限りです

最近、めっきり入院しなくなったけど、いろんな所に修行に出るので学校には行ってません（テヘツ

それにしても、気って便利ですね。骨折程度の怪我なら一晩寝れば治るようになりました。どんどん、人外化してきた気がする・・・もちろん、マクダウエルさんの別荘使わせてもらってます

そうそう、最近夜までマクダウエルさん宅にお邪魔させてもらうことが多いんですが、どうにも夜になるとマクダウエルさんが茶々丸さん連れてどこかへ出かけてるみたいなんですよね

あと、停電の日の予定を空けておけとか言われてます。一応、マクダウエルさんに師事してる身としては断れないので予定は入れてません

と思っていた矢先に学園長に急な警備依頼をされまして、予定が入ったとマクダウエルさんに断りを入れてきました

いやまあ、怒られましたよ。ものすごく。進級のこと言ったら納得してくれましたけど

そのときお前がいなくてもどうにかなんとかあの坊やぐらいならなにと、所々不穏なこと言っていましたけどね

それはそれとして、卒業ができるように今日も学校へ行く今日この頃です

今日は停電の日です

え？時間が飛んだ？まあ、硬いことは気にしない気にしない、HA

H A H A H A

「急にすまぬな。停電の日には学園を覆う結界が消えてしまったために、侵入者や襲撃が増えての」

「いやいや、どうせ暇でしたから」

ありきたりな答えの俺

その後の説明で俺は学園内の端っこにある橋の担当になりました

「では、午後8時から12時までの4時間がんばってください！」

「はい！」

午後8時

暇だな

他のところへのフォローはデスメガネがやってくれるので、基本その場から動くことは無い。下手に動いてそこを攻撃されるとやばいからだ

「だれか、来ね〜かな〜」

橋の真ん中にある門？みたいな所の上でストレッチしながら呟く

『こおる大地！！』

響く声に振り向くとそこには少年に魔法攻撃を仕掛けるマクダウエルさんがいた

出て行かないほうがいいかな

橋の上に立つ少年とマクダウエルさんと茶々丸さん

すると、マクダウエルさんと茶々丸さんが光の帯に捕まる

「・・・・・・」

何か喋っているようだが俺には聞こえない

聞こえずれば聞こえると思うのだが・・・面倒くさいしいいか

すると、光の帯が壊れる

文字通りバラバラに壊れる光の帯

よく見るとあの少年はネギ・スプリングフィールドであることが確認できた

そして、ネギから長い杖を奪う茶々丸さん。奪った杖をマクダウエ

ルさんに渡す

そして、杖をそのまま橋の下へ捨てるマクダウエルさん・・・鬼だな。ああ、鬼か、吸血鬼だもんな

そのままネギを押し倒すマクダウエルさん。彼女の口が少年の首もとに近づく

すると、マクダウエルさんが一人の少女の蹴りによって吹き飛ばされる

人間って吹っ飛ぶもんかね？・・・吹き飛ばか

姿を隠す、ネギと蹴りを入れた少女

うーん、こっからはバレバレなんだよね。もう一人か二人仲間がいたら見つかってよなあコレ

少しの会話を経てキスをする二人・・・はあ？

二人が光に包まれる

その光で二人の姿を確認したのだろう、マクダウエルさん、茶々丸さんの二人が光のほうを向く

何かネギが叫ぶ

走り出す少女と茶々丸さん

おお、荒削りだけどいい動きするね彼女

つと、いけね。こっちも始まってた

慌ててネギとマクダウエルさんのほうを向く。二人はもうすでに闘いを始めていた

飛び交う魔法、光の奔流、拮抗する闇と光

光が打ち勝つ

すると、下着姿のマクダウエルさんが中に浮いていた

そこに夢中になった俺はポケットの中にある携帯が振動することです頭が冷える

携帯を見る・・・メールだ、学園長からの

どうやら、予定より早く停電を回復させるらしい

街のほうを見るとちらほらと電気が点くのが確認できる

「きゃんっつ！ー！！」

叫び声のほうを見るとマクダウエルさんが落下していた

おい、マジかよ!?

慌てて飛び出す俺。水面めがけ瞬動術を使用する

しかし、マクダウエルさんは箒に乗ったネギの腕に抱かれ難を逃れる
水の上に立った俺はそのまま水の上を走り町へ戻る

別段変わったことは無かった。侵入者や襲撃も無かった

コレが今日の俺の日誌である

後日、どうやらあの場に俺がいたのが茶々丸さん経由ではれたよう
で、なぜ加勢しなかったとどやされました

第三話〜停電〜（後書き）

どうでしたか？

今年最後の投稿が大晦日か・・・感慨深い物です
では、良いお年を

第四話、修学旅行一日目、（前書き）

みなさん、明けましておめでとございます！
年明け一発目の投稿です
もうちょっと早く上げたかったです

第四話　修学旅行一日目

どうも、播磨力です

今日は学校で修学旅行の行き先決定がありました
適当に「そうだ、京都へ行こう」なんて言ったら、京都に決まりました

大丈夫か俺のクラス・・・？

今は、学園長室に呼ばれたので向かっています
どん

誰かとぶつかる

「ああ、すいません。大丈夫ですか？」

ぶつかった人を見る、こいつネギだ

「こちらこそすません！」

「そうですか、ではこれで」

そのまま歩き出す

ネギのほうもどうやらまた走り出したようだ

「急に呼びだしてすまん。停電のときは助かったぞい」

「いやいや、それほど。それで学園長、用件とは？」

「うむ。お主のクラスは修学旅行で京都に行くそうじゃな？」

「はい、そうです」

「どうやら、ネギ君たちのクラスも京都での。すまぬが、ネギ君が
西の長に親書を渡すのを助けて欲しいのじゃ。無論、お主のできる
範囲でよい」

「西の長とは？」

その後、京都にある関西呪術協会のことや、関東と関西の確執のこ
とを説明されました

「うむ、京都には孫娘の木乃香を狙う輩がまだいるからの。爺とし
ては心配なのじゃよ」

「はあ、そうですか。じゃあ、自分のできる範囲でいいならばやりますよ、協力」

「そうか、やってくれるか。たのんじゃぞ」
頭を下げる学園長

「では、もう用事が無いのなら僕はこの辺で」
そのまま部屋を出る俺

さあ！さあ！

待ちに待った、修学旅行です！！

余裕を持って駅に集合します
新幹線に乗るなんて久しぶりですね、何年振りだろ？・・・5年ぶりくらいかな（適当）？

「なあ播磨？」

「ん、なに？」

「トランプかUNO持ってきた？俺忘れたんだけど」

「あ、それなら俺持つてるトランプ」「俺UNO持ち」「俺どっちも」

「で、お菓子は？」

「もち、もってきてる」

うーん、変なところまでまとまってるよなウチのクラス。真面目なヤツもそうでないヤツも全員お菓子持参で、お菓子を賭けた大富豪大会やらポーカー大会、UNO大会までするんだから

なんて、クラスのヤツと騒いでいると新幹線に乗る時間になったので新幹線に乗る

「あ、俺ちよい抜ける。トイレ」

「いってら」

大富豪で富豪で上がりトイレに行く俺

確か女子も近くの車両に乗ってるんだよな
なんて思いながら歩く俺

トイレの帰り道にに桜咲さんがいた

「おや、こんにちは」

コレでも気軽に挨拶できるほど仲は良くなってるはずだ

「ああ、播磨さん。そっちのクラスも京都ですか？」

「ええ、まあ。こんなところで何してるんですか？」

「ちよつとした野暮用です」

「そうですか。ああ、学園長から俺の事聞いてますか？」

「はい、聞いてます。どうしようも無くなったら彼に頼れと」

「あゝ、それならいいです。じゃあ、何かしらピンチになったら俺
呼んでください。飛んでいきますんで」

「わかりました」

「それじゃ、また」

そのまま、自分の座席に帰ろうとすると何かが飛んできた
キン

それを一刀両断する桜咲さん

斬るのはいいけど、俺危なくね？

「待てー！ー！！」

うわ、走ってきたよ。ネギ先生・・・まあいいや、戻ろ
歩き出す

力が戻った後の車内

「おい、アニキ！きつと、あの女とその前にすれ違った男も西のス
パイだぜ」

「えゝ！！じゃ、じゃあ・・・桜咲さんが西のスパイ！？しかも、
もう一人も西のスパイだなんて・・・ど、どうしよゝ！？」

西のスパイと勘違いされる力であった

さあ、着きました京都！！
最初の感想・・・駅かけええな、おい

来ました、清水寺

「なあ、知ってるか？清水の舞台から飛び降りても8割ぐらいの確立で生きてるらしいぞ」

てきとーに隣にいるヤツに言ってみる

「マジか！！おい、飛びおりっぞ！」

「おっし」

「押忍！」

7、8人ほどが飛び降りようとする

やば、これ何人が逝くぞ

「ばかもん、やめんか」

あれ、全員楠木先生に連れてかれた

さてさて、ホテルに着きました。まさか、女子と同じホテルとは・・・

・呼ばれる回数が増えそうだな

「なあ、播磨。このホテル女子と同じなんだろう？」

「らしいな。それがどうした？」

「いくか？」

「どこに？」

バラダイス

「女湯さ」

「めんどい、パス」

「けっ、つねえな」

そう言つて、他のやつを誘う同じクラスの田中（不真面目な方）

後で、ロビーにそいつ含む10人ぐらい同じクラスのヤツが正座させられてました

コンコン

「ん？」

夜。部屋の窓近くの椅子を使って鍛錬していると外にちっちゃい桜咲さんがいました・・・何でもありか、おい！とりあえず、開けるか「どうしました？」

「えっと、驚かないんですね。ワタシ、式神のちびせつなです。お部屋はあなた一人ですか？」

「はい、全員捕まりましたんで」

「そうですか・・・って、そんなことじゃなくて！木乃香お嬢様が誘拐されたんです！今は、ネギ先生達と犯人を追っています、播磨さんにも来て欲しいとのことですよ」

「ああ、そうですか。はい、行きますよ。場所はどこですか？」

「駅のほうです」

「えっと・・・とりあえず、跳ぶんで？まっついてください」

「え？」

そのまま、ちびせつなを掴み瞬動術を使い跳ぶ力

「え〜〜！！！」

京都駅にて

「逃がしません！このかさんを返してもらいます！！」

『契約執行180秒間！！ネギの従者神楽坂明日菜！！』

言葉とともに光に包まれるアスナ

「桜咲さん、いくよ！！」

「はい！！（早く、来てください。播磨さん！！）」

駆ける二人

「あ、アスナさん！アーティファクト出します。使ってください！」

『能力発動！！神楽坂明日菜！！』

アスナの手にハリセンが現れる

「何コレ！？ただのハリセンじゃない！？」

「え、でも！？」

「もー！いつちやえー！」

そのまま、天ヶ崎千草が生み出したサル型の式神に突っ込むアスナ。
アスナのハリセンに触れたとたん、式神が消失する

「なんかよくわかんないけど・・・桜咲さん！そのクマも任せて、早くこのかを！」

「はい、すみません！」

そのまま、天ヶ崎千草の元へ走る刹那

しかし、それは一人の少女によって防がれる

「どうも、神鳴流です」

立ち上がる少女

「お、お前が神鳴流剣士？」

「はい、月詠います」

困惑する刹那に両手に持つ二刀で攻める月詠

「ホホホ、甘く見てると痛い目みますで」

二刀の攻めに守りに徹するしかない刹那

「ちょ、なんなの、このサル！？」

小さいサルに纏わりつかれるアスナ

「ホホホ、これで足止めOKや。所詮、素人中学生と見習い剣士や」

『風の精霊11人！！縛鎖となりて敵を捕まえる！！』

「しもた、ガキを忘れた！^{ほんたい}」

「もう遅い！！」

『魔法の射て、戒めの風矢！！』

ネギの手にある杖から光が飛び立つ

「ひいい、おたすけ！」

あわてて、人質である木乃香を盾にする天ヶ崎千草

「あわわわ！！」

それを見たネギは光の方向を変える

「ん？・・・はっはゝん。さては、この娘を傷つけることができひんのやな？甘ちゃんやな。ホンマ、この娘は役にたちますな」

「ぐっ、このかをどうするつもりよ？」

クマの式神に体を掴まれながら千草に問うアスナ

「せやなゝゝゝ。まずは呪薬と呪符をつくて口利けんようにして、上手いことウチらの言うこと聞く操り人形にするのがええかなゝ」

「なゝゝゝ！？」

「なんですつてゝゝゝ！？」

「ほゝれ、ケツの青いガキども、ほゝれ、おしゝりぺんぴぐはああ！」

木乃香を担いでいた千草は突然現れた人間の上段蹴りを顔面にくらう

「ふう、どうも助っ人登場ですよゝ」

軽い感じで木乃香を担ぎ上げ手を上げる男は浴衣姿の播磨力であった
そのまま、木乃香を地面に下ろす力

「あ、あなたは！？」

「アンタ！この前学校の前にいた！？」

「播磨さん！間に合っただんですね」

「ええ、まあ」

「ネギ先生、神楽坂さん、この人は味方です」

「「え！？」」

「そうそう、学園長からネギ先生の手助けするように言われてんの」

「そ、そうなんですか」

「とりあえず、さっきの女は？捕まえないと！」

千草は猿の式神をだして逃げていった

「あつ！」

「あららゝ、逃げられちゃいましたねゝ」

「なあ、さつきよゝ、呪薬がどうたらとかあの女言ってたじゃねえ
かよ。大丈夫か？」

「そ、そんなまさか！？」

カモの一言に焦る刹那

刹那は慌てて木乃香を起こす

「お嬢様！お嬢様！」

「ゝゝゝん？あつ、せつちゃんやゝ」

「よかった、木乃香お嬢様」

「やつぱり、せっちゃんはウチのこと嫌ってなかったんやな」
少し涙ぐむ木乃香

「えっ、それはその・・・」

すぐさま、木乃香から離れる刹那

「し、失礼しました！私の力不足でこのようなことになってしまい、あまつさえ、ネギ先生たちを巻き込んでしまうとは・・・それに私は・・・えっと、その・・・御免！！」

そう言つてその場から離れていく刹那

「あら、行っちゃったね」

「えっと、播磨さんでしたっけ？」

「そうそう、播磨力。困ったことあつたら声かけてよ。一応、助っ人だからね」

「はい！ありがとうございます！」

「んじゃ、君達は早く帰りなさい」

「なんで、アンタに言われなきゃなんないのよ？」

「いいじゃん。早く帰んなよ。寝不足はお肌の天敵だぜ」

「まあいいわ。早く帰りましょ」

「でも、このあたりを直しておかないと」

「ああいいいよ。俺やつとくから」

「じゃ、じゃあ。お願いします。さようなら」

「じゃあ、また」

「またね」

「おやすみ」

帰っていくネギたち

その姿が見えなくなると力は声をだす

「なあ、そこにいんだろ？親父。覗き見とは趣味が悪いぜ」

「ほう、わかったか？」

力のすぐ近くから一人の男が姿を現す

「何？俺に用？俺親父とは闘わないよ。かあちゃんと約束してるか

らね」

「そんなことではない。先程の闘いの様子を見てな・・・どうして止めを刺さない？」

「だって、まだ早いでしょ周りの子供達にはね」

「クツクツクツク・・・そうか、そうか。それから、瞬動術を使えるようになったようだ、あまりソレを多用しないことだ。ある程度の武人や術者との闘いに必須となる瞬動術は直線的な動きしかすることはできない。読まれやすい動きではカウンターを受けること必至だ」

「ほいほい、用はそれだけ？じゃあ、帰んなよ」

「ふん」

そのまま姿を消す範馬勇次郎

「うえー、いやなヤツと会っちゃった」

その後、一人でその辺りの修繕を行う力であった

第四話　修学旅行一日目（後書き）

どうでしたか？

勇次郎が初登場です

シチュエーション的にはジャックに噛みつき攻撃を教える勇次郎的な感じです

第五話く修学旅行二日目く（前書き）

連日投稿!!

短めの話ですけど

バキって読み返すと面白さが増えますね

第五話　修学旅行二日目

京都某所にて

「やあ、範馬^{オーガ}勇次郎。どこに行っていたんだい？」

椅子に座る白髪^{テメー}の少年が言う

「なあに、自分の息子に用があっただけだ」

少年の対面に座りながら勇次郎は言う

「で、どうだい？この前もう一人の息子・・・刃牙君からは挑戦されたのだろう？」

「さてな。ったく、どいつもこいつもマザコンばかりで困ったモンだぜ。特にリキだ。あの女の言いつけ守って俺とは闘わねえとほざきやがる」

「じゃあ、その母親を見つければいいんじゃないのかい？」

「見つかんねえもんはしょうがねえ。アメリカ空軍^{ストラダム}を使っても見つかんねえ」

「へえ。そんな人間もいるんだね。まあいいや。あなたには今回の重要な役目を担って貰っているんだ。頼むよ」

「へいへい。じゃあ、約束の日時までは自由にするぜ、いいな？」

「ああ、問題ないよ」

「そうか、じゃあな」

椅子から立ち上がりその部屋から出る勇次郎

「それにしても、彼に息子がもう一人いたとは・・・」

その呟きは部屋の外に出ることは無かった

「おっす」

朝、食堂でご飯をばくついていると昨日ロビーで正座させられてた田中が話しかけてくる

「おはよう、ふえ、なふい？」

「口に物入れてしゃべんな」

「……で、なに」

その一言を言うと言事を再開する力

「いや、今日はどうすんの？俺ら、このまま鎌倉行くけど」

「ん……行く行く、鎌倉」

「そうか。じゃあ、後でな」

「うい」

みたひ
三度食事を再開する力

それを見ていた者は言う

「どれだけ食うのかってかんじだよな」

「ああ。過食のレベルを超えてるよな」

「あつ、おひつのおかわり行ったぜあいつ」

「うわ、茶碗に入れるのめんどくさくなっておひつからご飯食ってるぜ」

「……よく喰うなあ」

食堂にいたほぼ全員の感想を代弁を4人がした

「おお、これが大仏か」

あの手で正拳突きすりゃ菩薩拳になるんだよね……やってみるか？いかんいかん、やったらめんどくさいことになる

あつ、ネギだ……ほっとう

「鹿いるな……食ったら美味いかな？」

「食うな食うな」

「え！？心の声出てた？」

「出てたよ！播磨の心丸見えだったよ！」

「そうか……」

そのまま鹿の群に向かう

「おい、鹿みんな逃げちったよ」

「あちゃ」

だめだな。最近動物に近寄ると逃げられるんだよな
彼は知らない。動物に存在する生存本能が彼に対し逃亡という行動
をとらざるおえなかったことを

「あれ？播磨もう風呂入ったのか？」

「ああ、人空いてるときに入りたかったからな」

ただ単に体見られたくないだけなんだけどな・・・筋肉とかつきか
たおかしいし

「そう。じゃあ、俺たちも行きますか」

「「「おう！！」」」

「「「行くぜ女湯コトヒナツツツ！！」」」

「いつてらっしゃい」

部屋を出て行く他の班員

「どうせまた正座になるんだろうな」

そのまま夜の京都に目を向ける力

「なんのようかな？」

「おや、ばれていたのかい？」

部屋の中にはいつの間にか白髪の少年が立っていた

「で、何の用かな？まあ、なんかうるさいし寝られそうに無いから
いいんだけどさ」

「単刀直入に言うよ。この件から手を引いてくれないかい？君みた
いなイレギュラーがいると計画が上手く進行しないんだよ」

「・・・いやだ」

「何故だい？」

「どうせ、そっち親父と一緒にいるんだろ？あんなヤツと闘えんの
俺ぐらいじゃん」

「へえ・・・よく知ってるね」

白髪の少年が少し身構える

「やめとけよ。一応、ソコも俺の領域エリアなんだからよ」
静かに言う力

「わかったよ。ここはボクが下がるう」

そのまま消える白髪の少年

「はああああ、しんどおおおおお・・・なんか、すつつつげ疲れた」

一気に脱力する力

「あゝあ、汗かいちった。どうしようかな、温泉行こうかな？まあ、いいや。行こう」

「おお、りきネ」

「くーふえいさん。どうもこんばんは」

途中で枕持ったくーふえいさんにからまれました

「この御人は誰でござるか古菲殿？」

「りきネ。私の好敵手ライバルヨ」

「どうも、播磨力です」

「拙者は長瀬楓でござる」

「ござるってどこの侍だよ」

「どこに行く途中ネ？この辺りほつつき歩いてると新田に捕まるアルヨ」

「風呂に行く途中ですよ。まあ、捕まらないように行きますね」

「じゃあ、がんばるネ」

「はい、がんばりますよ」

風呂場に向かって歩き出す

途中で新田先生に捕まったけど温泉入りたいんですって言うたらなんかすんなり通してくれました

ロビーに何人が知った顔が正座してたけどな・・・

第五話　修学旅行二日目（後書き）

どうでしたか？

力くんは面倒見良かったりするんでクラスの人間からの信頼は厚いです

しかし、やっと古菲出せましたね

この調子で書いていきたいです

第六話〜修学旅行三日目・？〜（前書き）

少し、更新が遅れてしまいました

ともかく、修学旅行編もいよいよ大詰めです
このままがんばって書いてゆきたいです

第六話　修学旅行三日目・？

今日は朝先生に封筒を貰いました。中身は学園長からの手紙らしいです

開けてみると手紙と地図が入ってました

手紙には関西呪術協会に行つて欲しいということが書いてありました
地図にそこまでの道順が書いてありました

行けっつか？はいはい、行きますよ。行けばいいんでしょう、行けば・・・こんなでいいのか俺の修学旅行

まあ、いつか

人生諦めも肝心さ

つてか、本部つて結構遠いのな。ロードワークがてらに向かつてるけど着かないな。だいたい2時間弱は走ってるのに

あ、あのなんか雰囲気あるヤツかな？巫女さんいるし
箒で掃除をしている巫女に近づく力

「すいませ〜ん！」

「はい、どちらさまでしょうか？」

「ここに来るように言われた者ですが」

「はい、聞いております。播磨力さんですね？」

「そうです」

「ではこちらへ。長がお待ちです」

「はいっす」

歩き出す二人

「ほ〜。すごいっすね〜」

「では、ここでお待ちください。間もなく長がいらっしゃいます」
力の目の前の階段から一人の初老の男性が降りてくる

「どうも、私が西の長の近衛詠春です」

「はじめまして、播磨力です」

「君のことは学園長から聞いていますよ」

「どのようにですか？」

「達人クラスの格闘家だとね」

「うわゝ。学園長もめんどくさい事言ってくれるね」

「そこでどうです？少し手合わせしませんか？」

「どうしようかな？・・・まあいいや」

「はい、よろしく願います」

外に出た二人

詠春が口を開く

「その格好のままでいいんですか？」

力は長いカーゴパンツに長袖のＴシャツという格好に裸足であった

「はい、問題ありません」

「木刀使いますけどいいですか？」

「大丈夫です」

「じゃあ、いきますよ！」

詠春が木刀を振り上げたまま力に近づき振り下ろす

その木刀の横腹にあわせるように力が体を回転させる

振り下ろした木刀を力方向に回転させなぎ払う詠春

それをバックステップでかわす力

「今のを避けますか」

「まあ、こつちも鍛えてますから」

今度は中段に構える詠春

「・・・っふ」

短い息とともに付を繰り出す詠春

薄皮一枚でかわし距離をつめる力、詠春の胸に正拳突きを打ち込む力

しかし、その拳は木刀の柄によって防がれる

「は？」

一瞬の間が力に生まれる

それを逃すはずも無く詠春は力の頭に木刀を振る
かわす力

しかし、倒れる力

「ふゝ・・・顎にかすりましたね」

そう。力は詠春の振った木刀を完全にかわしきれておれず顎をかす
ったのだ。その一撃で力の脳は頭蓋骨に幾度と無く叩きつけられ、
脳震盪を起こしたため、倒れたのだ

「誰か、部屋に布団を。外に寝たままでは風邪を引いてしまいます
（それにしても、未恐ろしい子供だ。気による強化をしている素振
りを見せていないということは武術の技術のみで私と渡り合ったと
いうことか・・・。これはいいよこの子が何者か気になります
ね。この年齢であそこまでの技術とは・・・）」

力を担ぎ上げる詠春

その闘いを見ていた巫女達は協会内部にある一室に布団を敷きに行
った

ドンチャン、ガッチャン

「・・・ん、うん？あれ、ここどこ？」

上半身を起こす力

「・・・とりあえず、声のほうへ行くか

布団の中から抜け出し部屋から出る力はそのまま声のする方へ歩き
出す

うわ、大分力オスだ

音のする部屋に入ってみると力の目に飛び込んできたのは、酒が入
ってるのか分からないがやたらテンションの高い女子中学生の集団
だった

「あ、播磨くん。起きたんですね」

「はい。布団ありがとうございました」

軽く頭を下げる力

「いやいや。それにしてもよく眠ってましたね。中々、起きてこないで心配していたんですよ」

「最近寝てませんでしたから（エヴァさんとの組み手でね）」

「そうですか。では、たくさん食べないといけませんね。どうぞ食べてください」

たくさん料理を指差す詠春

「ありがとうございます。では、遠慮なくいただきます」

料理の前に座り小さく「いただきます」と呟き料理一つ一つに手を出していく力

「ねえねえ、あそこでご飯食べてる人って誰？さっきまではいなかったよね？」

力の存在に気づいた早乙女ハルナは隣に座っている朝倉和美に話しかける

「だね。誰だろ？宮崎誰かわかる？」

首を横に振る宮崎のどか

「誰かわかんないの？麻帆良学園報道部の朝倉さん？」

「待って、今思い出してるから・・・どっかで見た顔なんだよね」
ぐぬぬぬと呻きながら額に指を立て思い出そうとする和美

「あー！！思い出した、思い出した！！あいつ2年の初めのほうに学園の武術系の部活やらサークル見境無く道場破り仕掛けたやつだ。名前は確か・・・播磨、力だよ」

「へへ、なんでそんなヤツいるんだろうね」

「は、播磨力って言えばよく、クーふえさんが話に出すよね」
相槌を入れることしかしていなかったのどかが口を開く

「「ほ・・・」」

ハルナと和美の目が怪しく光る

二人が力に近寄り、話しかける

「ねーねー、その少年。うちのクラスのクーちゃんとはどんな関

係だい？」

「報道部の私としても聞きたいね。もしかしたら、大スクープかもしれないからね」

「は？」

「だからね、君にはくーちゃんとの関係を教えてもらいたいんだよ」

「そうそう、私たちそれだけ聞きたいだけだから。ね？」

ね？じゃねえよ。ね？じゃ

酔ってんのかこいつら？だとしたらカラミ酒って一番めんどくさいタイプの酔い方だぞ、たぶん

「ただの友達」

「へへ」

ニヤニヤする二人

「そうかいそうかい、ただの友達かい」

「な。んだ、ただの友達か。スクープでも何でも無かったや」

そのまま元いた場所に戻る二人
だが、その顔は終始にやけていた

「あれ、播磨くんはどこに行ったのでしょうか？」

「あ、本当ですね。どこに行っちゃったんだろう？」

「まあ、彼なら大丈夫でしょう。私たちは温泉に行きましょうか」

「はい！」

温泉という単語に目を輝かせながら詠春とともに温泉に向かい廊下を歩くネギ

その頃、力はというと

「ふっ、はっ……」

外に出て鍛錬をしていた

拳を繰り出し、蹴りを織り交ぜ、そこにひじやひざなどによる攻撃

も入る、彼のオリジナル

徳川光成は言う

「そうじゃの、範場刃牙は言うなら範馬刃牙流拳法、そして播磨・

・いや、範馬力は範馬力流拳法を使う。互いが互いに似ておる、流石は兄弟じゃ。しかし！そこには明確な違いがあるっつ！刃牙は^{ちから}力を十全に活用し、力は技術^{わざ}を十全に使い闘う！」

洪川剛氣は言う

「力さんの才能には私も感服しております。力さんはあの年齢^{トシ}で有名どころの技を身に付けている。もちろん、私の所にも来ましたよええ、合気について教えて欲しいとね。そうですな・・・半年とあったところでどうか、その期間で彼の望む水準までは達したのでしょうか、お礼の菓子置いて。それっきり来なくなりましたよ」この二人から分かるように、彼の武術に対する才能は限りなく最高のモノに近い

しかし、彼はそのためあらゆる武術に手を出し、それら全てを達人に一步足を踏み入れる手前で止め、その中で自分のオリジナルを作り上げてゆく

そして、今まで絶えることなく動いていた体が急に止まる

「・・・風呂入りたい」

彼の姿は上半身裸にそのままのズボンという格好だがその上半身は汗によりびっしょりと濡れていた

彼はその姿のまま屋敷に戻り、宴の会場にいた巫女から聞いていた温泉の場所へ向かい歩みを始める

屋敷が襲撃されているとも知らずに

第六話く修学旅行三日目・？（後書き）

力くんは少しつめがあまいですね

後、油断もけっこうします

さて、勇次郎はこの話にどれくらい噛んでくるのか・・・
てか、ピクルどうしようかな・・・

第七話く修学旅行三日目・？く（前書き）

連日投稿！！

修学旅行編ってネギまの中でも1く2を争う面白さだと思います

第七話　修学旅行三日目・??

力は廊下を歩いているが周囲の異変に気づく
声がないな

そう、力が外に出る前はうるさいほどの声が屋敷中に響いていたの
だが、今は声が聞こえず、不気味な静けさが屋敷を覆っている
ドガン!!

何かを壁に叩きつけたような音が響く

「・・・とりあえず行くしかないよな」

走り出す力。向かった場所は目指していた場所である温泉であった

「今の君では僕を倒すのは無理だよ・・・」

水となつて消える白髪の少年

「あ！待て！」

ネギの叫びは温泉にむなしく響くだけであつた

そこに一本のバスタオルが投げ込まれる

それをキャッチし裸のアスナにかけるネギ

「おお、適当に投げたのに、よく分かつたねネギ先生」

「は、播磨さん!!今までどこにいたんですか!?!」

温泉に入つて来た播磨に詰め寄る刹那

「すいません、ちよつと外に。いったい何があつたんですか?」

「お嬢様が攫われたんです!しかも、他の皆さんも石にされて・・・
つ!ともかく今はお嬢様を追いかけるのが先決です!」

「そ、そうですね刹那さん!それじゃあアスナさんはここにいてく
ださい!」

そのまま走り出そうとする二人

「え、ちよつ待ってよ!私も行くわよ!!今着替えるから!」

着替えを取りに脱衣所に走るアスナ

「その前に、攫つた奴の場所わかんのか?」

力の一言で走り出そうとしていた二人は静止する

「そ、そうでした！刹那さん分かりますか！？」

「大方の場所は分かります、早く追いかけてみましょう！」

「はい！」

「私も行くわよ！」

着替えてきたアスナ

「じゃあ、俺も行きます」

刹那を先頭にして走り出す4人

「とりあえず、移動中にこれからのことを決めましょう」

走っていたネギが喋り始める

「そうだ、いい案を思いついたぜ！」

それまでネギにしがみついていた力モが喋り始める

オコジョが喋った・・・ああ、魔法か

特にリアクションせず自分の中で解決した力であった

「何ですか、カモさん？」

「な、に、簡単なことだよ。刹那の姉さんあねと兄貴がちゅすんだよ」

「な、何言ってるのよ！こんなときに！」

「ち、違うよ姐さんバディクォー仮契約のことだよ。刹那の姉さんは気が使える

んだろ？それに兄貴の魔法による強化が合わされば一気にパワーア

ップってわけさ・・・成功するかどうかはわけんねえけどな」

「と、ともかく早く追いつきましょう！もうすぐのはずです」

その言葉通り四人はすぐに木乃香を攫った白髪の少年や天ヶ崎千草

たちに追いつく

「待て！そこまでだお嬢様を返せ！」

刹那が叫ぶ

そして、力を除いた三人が自分の得物を持ち構える

「また、あんたらか。ホンマ、しつこいやっちゃな」

「天ヶ崎千草、明日の朝には応援が来る！無駄な抵抗はやめて投稿

するがいい！」

時代劇かつ！・・・突っ込まないでおこう

「応援がなんぼのもんや。そんなもんあの場所に息さえすればどうにでもなるわ。それよりも、あんたらにもお嬢様の力を一端を見せたるわ。本山で頭かくしてガタガタ震えておいたほうがよかったと後悔させたるで」

『オン』

千草たちの周りに光の輪が生まれる

その光の輪の中から異形のモノ達が現れる

「ちよつと、ちよつとこんなのあるの〜！？」

アスナが叫ぶ

「このか姉さんの魔力使って手当たり次第に召喚しやがったな」

「百体ぐらいかな？」

とりあえず問題は無いかな？近接武器持つてる奴らがほとんどだし、結局は敵の数はみたいなもんかな？

「あんたらはその鬼どもと遊んでてもらおか。言^ゆつてもガキやし殺さんようにだけは言^いつといたさかい、安心しときい。ほな」

そのまま移動する千草たち

「と、とりあえず時間を稼ぎましょう。今僕が障壁を」

『逆巻け春の風・我らに風邪の加護を・・・風花旋風風障壁！！』

力たちを囲むように竜巻が現れる

「おお、魔法つてこんなこともできんだ」

「驚いてる場合じゃありませんよ播磨さん！」

「この障壁は二、三分しか持ちません！早くこの後のことを決めないと」

「二手に分かれるしかありませんね。ここは私が抑えます。皆さんは先に行ってください」

「そ、そんな！？」

「大丈夫です。元々、ああいった化け物を退治するのが私の役目ですから」

陰陽師的な感じかな？

「そ、それじゃあ、私も残る！」

「あ、アスナさん！」

いやに男らしいな

「いや、あながち間違いじゃねえかもしれないねえぜ。姐さんのハリセンは何でかはしらねえが一撃で鬼達を返せる代物だ。どうにかなるかもしれないねえぜ」

「なるほど、そうですが・・・」

「兄貴、姐さんへの魔力補給はどれくらい持つ？」

「5、10いや15分は持たせるよ」

「現状で、あの白いガキを倒す必要は無いんだ。とりあえず、このか姉さんさえ取り戻せばそれでいいんだ。兄貴は杖で飛んでいける・・・そうだ！兄貴が単身このか姉さんを取り戻してここで合流すればいいんだ！」

そうれだと・・・

「そのような計画上手いくでしょうか？」

「まあ、それ以外に案がないしそれでいいんじゃない？」

「そうでしょうか？」

「あれだろ？こつちが早く片付けてそつちに合流して追撃をかわす。それが一番だろ？」

それまで口を閉ざしていた力が会話に割り込む

「それだぜ！」

「じゃあ決まりだ。それでいこうや」

「じゃあ、早いことアレやっちまおうぜ！」

「アレって？」

「キスだよ、キス。バディクォー仮契約だよ」

「「ええつつ！？」」

「非常事態だし、手札が多いほうがいいだろ！？」

うわゝ、このオコジョ必死だよ・・・ん？竜巻の風が弱まっている・

・

「急げ！障壁が解けるぞ！」

「す、すいませんネギ先生」

「い、いえ、こちらこそ、あの・・・」

うわゝ、見たるこっちが恥ずかしい

キスをするネギと刹那。二人を光が包む

「先生、このかお嬢様を頼みます」

「・・・はい！」

そのまま見詰め合う二人

「ちよつと、何見つめ合つてんのよ!？」

慌てて離れる二人

「おい、風が止むぞ！構えろ！」

力たちを囲んでいた竜巻が消える

『雷の暴風!!』

すぐさまネギが魔法を放ち、それをカモフラージュにしてネギは飛び出す

「・・・落ち着いて戦えば大丈夫です。せいぜい街でチンピラ100人に囲まれた程度とを考えてください」

「100人つてそれは・・・」

苦笑いのアスナ

「ああ、なら問題ないです。100人ぐらいなら何回か経験あるんで」

「「は!？」」

「さあ、来ますよ！」

「しょーがないわね。じゃ、ま、鬼退治といきましょうか！」

「はい！」

鬼に突っ込むアスナと刹那

「てりや！そりや！このお！」

荒削りで無駄も多い動きだがハリセンの能力で^{ちから}確実に鬼達を消していくアスナ

『神鳴流奥義百烈桜華斬！！！！』

そのアスナをサポートしながらも確実に鬼達を消してゆく刹那
その二人に対して力は自分から攻撃することはせず歩いている力を
攻撃してきた鬼を迎撃し消してゆく

「おい、何やあの兄ちゃ。えらい強いやないけえ」

「ありや、御殿手だ」
うどんで

狐面の妖怪が言う

「うかつに攻撃するな！反撃を貰うぞ！」

「おいおい、何ばらしんでんだよ。ったく、こつちから攻撃寸のめ
んどくせえのに」

ただ歩いていた力は歩くことをやめ、攻撃を始める。人型の妖怪に
対しては容赦なく水月に抜き手を打ち込み、人型ではない妖怪に対
しては中段の正拳突きを叩き込む

「今度は空手か！？」

同じ狐面の妖怪が言う

「最近のトレンドが空手なもんでね」

この前、愚地独歩先生に空手の手ほどきしてもらったからね

「はあ！！」

先程から話している狐面に攻撃を仕掛ける力

しかし、狐面の妖怪が持つ得物は刃付きのトンファーである

「トンファーとか闘ったことないし、ちょっと、勉強させてもらう
よ」

「いい度胸だ！この状況で私から学ぶとはな！」

力の放つ上段蹴りを狐面はしゃがんでかわす

立ち上がる事と共に力に下から上にかけての刃による攻撃をしかけ
る狐面

それを蹴った足で踏みつけ破壊する力

「くっ！」

一旦、力から離れようとしバックステップをしようとする狐面
しかし、その行為を力が許すはずも無く胸倉をつかみ狐面に正拳突

きを打ち込む力

「ここまでとはな」

血を吐きながら少しずつ消えてゆく狐面の妖怪

その顔にある面は割れていた

「女かよ」

あつちやゝ、もろ殴つちつた

「そうだが？」

「うんにゃ、何でもねえよ」

「そうかい」

「また、闘^やろうや」

「ああ、こちら也大歓迎だ」

消えてゆく狐面の妖怪

周りを見回す力

「さあ、まだまだいくぜえ！」

そのまま手当たり次第に正拳突きや蹴り、抜き手、手刀などを急所などに打ち込んでゆく力

しかし、彼は力が足りないため何度かの連撃を利用する

だが、やはり一人では無理があつたのか次第に攻撃のキレが無くなつてゆく

「ほれ、兄ちゃんこの程度かい？」

鬼の金棒による攻撃を何とかかわす力

「う、るせええ・・・まだいけるわ、ぼけえ」

しかし、反撃することはできない

そこに鬼の追撃が入る

しかし、鬼の棍棒が折れる

「こ、これは術を施された弾丸・・・何奴っ！？」

「らしくない苦戦をしてるようじゃないか。この助っ人の仕事料はツケにしといてあげるよ播磨に刹那」

「うひょゝあのでかいのは本物アルか？おお、りきもいるネ」

龍宮真名と古菲が現れる

真名はスナイパーライフルのようなもので妖怪たちを狙撃してゆく
「それは本物アル？」

「ただのエアガンだよ」

しかし、そこを烏族に囲まれる

「ククク、接近戦ではテッポウは使えまい」

真名は足元に置いてあるギターケースから二丁のハンドガンを蹴り
によって浮かせ、それを掴む

そのハンドガンを使い取り囲んでいる烏族たちを消す

「へー、ガンⅡカタなことやってら」

「アイヤー、流石は真名アルねー。しかし、私本物のオバケ見るの
初めてヨ」

「古、お前は人間型の妖怪だけ相手しておけばいいぞ」

「中国四千年の技なめたらアカンアルよー！」

古菲に群がってきた妖怪たちに拳を放つ

『馬蹄崩拳！！』

それにより吹き飛び消える妖怪たち

「さあ、もつと強いヤツはいないアルか？」

「調子に乗つてると怪我するぞ」

そうして妖怪退治に参加する二人

二人の投入により押され気味であった力たちも再び盛り返す

そうすると、光の柱が遠くに現れる

「あれは・・・」

「ネギの奴間に合わなかったのね！」

その中で一人播磨力の纏う空気が変わる。それにいち早く気づいた
のは古菲であった

「り、りきどうしたアルか？」

答えない力

歯を食いしばり、心なしか普段より髪が逆立っている

「くーふえいさん、皆に言つといてください。先に行く、と」

有無を言わせない雰囲気の方に古菲は一つの答えしか言えなかった

「わかったアルよ」

「ありがとうございます」
消える力

「ちっ、やべえな。やっぱり出てきやがったか親父い！早いところ行かねえと、ネギ先生が壊されちまう」

走る力。瞬動術を利用した移動だ

その後ろの方では刹那とアスナが共に光の柱の下へ向かっていた

第七話く修学旅行三日目・？く（後書き）

はい、どうにもまとまらなかったのもう一話引き伸ばします
学校始まるので次話の更新遅れると思います
すいません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8638z/>

強さを求めて

2012年1月9日19時52分発行